



昭和 47 年 8 月 6 日・自宅にて「森先生を囲む会」のメンバーたちと一緒に誕生日祝いをする
森先生ときよ子夫人

森蘊氏ときよ子夫人与「槐の会」

森蘊氏（一九〇五―一九八八）は昭和期に活躍した日本庭園の歴史家であり、作庭家であった。

明治三十八年八月八日に東京府立川村（現・東京都立川市）に生まれ、東京帝国大学農学部で造園学や建築学などを学んだ。昭和二十七年四月十六日に新しく設立された奈良文化財研究所の建造物研究室長に任務されてから、奈良を拠点として庭園の研究や作庭の活動を続けた。

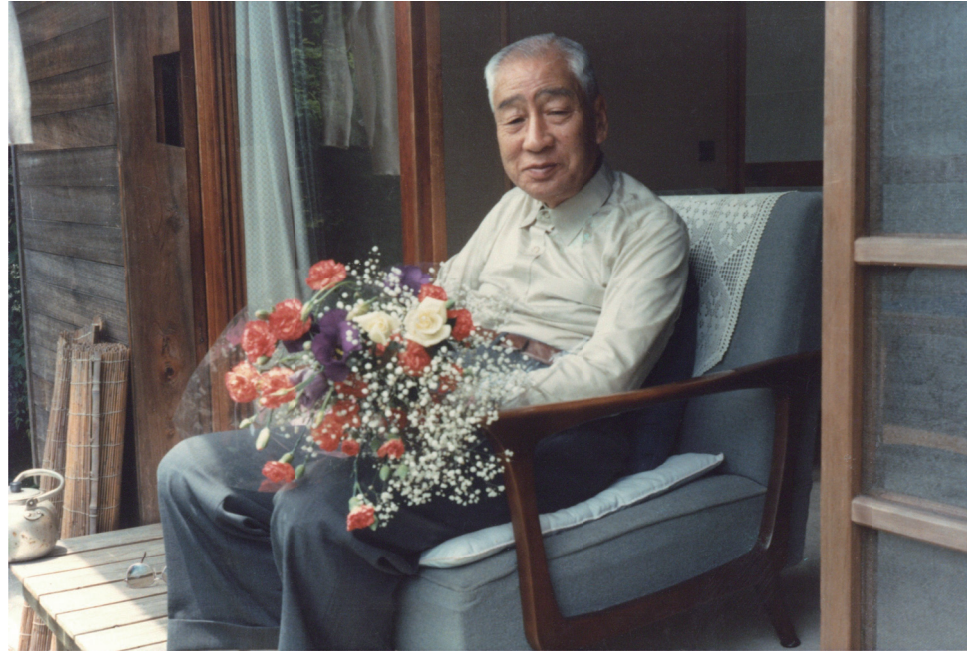
昭和二十八年二月三日、森氏は当時の学者や文化人に愛用されていた日吉館に下宿していたときのこと。有名な女将田村きよのさん

に奈良女子大学の学生を紹介され、休日には奈良や京都などの古庭園を案内したり、時には庭園の測量の手伝いを依頼するなどの交流が始まった。学生たちに奈良での新生活の手助けなどをしてもらうこともあったようだ。

昭和三十二年十月一日から、森氏は奈良女子大学に非常勤として半年ほど教鞭を執ったことがきっかけで、女子大生の輪が広がった。

昭和三十四年にそれらの学生たちもみんな卒業していったが、同年にきよ子夫人（旧姓常見 一九一六―二〇〇七）と再婚したので、数年後に交流が再開したあとは、庭園の見学のみならず、毎年八月に、森氏の自宅でにぎやかに誕生日を祝うようになった。

昭和六十三年十二月十四日に森氏が亡くなった後も、きよ子夫人を中心に庭園の見学や旅行などが続いた。「森先生を囲む会」という集まりは先生亡きあと「槐えんじゅの会」と命名され、今に至っている。西ノ京の森邸の庭に、毎夏、白い花を咲かせていた槐の木に因んだものである。



森先生ご自宅にて

まえがき

森蘊先生が逝かれて三十余年、きよ子夫人とのお別れから十四年の時が流れました。しかし、私ども槐の会（森先生を囲む会）の仲間は、先生ご夫妻のことは片時も忘れられません。

昨夏、奈良、平城宮跡資料館で先生の研究成果をまとめた「奈良を測る——森蘊の庭園研究と作庭」なる企画展がありました。この展示を指導したエマニエル・マレス氏のお誘いと解説を頂き、見学した仲間数人は、森先生の功績の大きさに改めて眼を瞠りました。その折、マレス氏から「あなた方だけが知る森蘊氏の日常の姿を書き留めておいてはどうか」と強く勧められました。思いがけないご提言に戸惑い、ためらいましたが、先生への尽きることなき想いもあり、この機を逸してはならじと話し合い、槐の会の仲間呼びかけ、原稿収集を始めました。が、仲間の半数はすでに鬼籍に在り、なかなか思うようには事は進みませんでした。

しかし、私どもの学生時代から、それぞれのその後の人生にまでわたって、深い示唆と

愛情をお与え下さった、先生との豊かな時間のことは語り継ぎ残さねばと励まし合い、六、七十年前の記憶を呼び起こしました。

マレス氏の指導と尽きない励まし、皆様のお力で上梓の運びとなりました。ささやかな冊子ですが、森先生というお人柄と日常に触れて頂ければ望外の喜びです。時空を超えて森蘊先生とエマニュエル・マレス氏のご縁の深さに感無量です。

富田 信子

目次

まえがき「富田信子」 1

「槐の会」記念文集 5

森蘊先生を偲んで「坂本歌子」 6

槐の木の下に——森先生と奥様そして私達の五十年「富田信子」 13

在学中の思い出「岡本万智子」 35

「森先生を囲む会」の皆様へ「近藤和美」 39

森蘊先生回想記「関山志ず江」 41

森蘊先生の庭「寺崎昌子」 54

森先生の思い出「中川敦子」 56

追想 森蘊先生 61／桂離宮と森蘊先生「中島悦子」 77

森蘊先生の思い出「細川文代」 82

薬師寺の庭と森先生「安田順恵」 88

森先生からの絵葉書 93

寄稿

森蘊先生を偲ぶ「池下美代子」
大いなる導き「神木康代」 106
112

資料

日本美術史ノート「池下美代子筆」 116
随筆「ごまめ」 「森蘊」 128／付記「ごまめと先生」 「関山志ず江」 130
会員追悼文「天上に在ます西田敦子さんに捧ぐ」 「森蘊」 131

年表

森蘊先生との出会い、そして社寺・庭園見学の記録「1953（昭和28）年～1967（昭和42）年」
森先生を囲む会（槐の会）の記録「1967（昭和42）年～2007（平成19）年」 136
138

あとがき「関山志ず江」 144
槐の会（森先生を囲む会）名簿 147
編集後記「エマニエル・マレス」 148

「槐の会」記念文集



この小冊子は森先生を囲む会（槐の会）のみなさんが強い思い入れを込めて、書き綴ったものである。ここに収録されている文章を読めばわかるように、みなさんにとって「森先生」は非常に親しく、身近な存在であった。年齢、性別、立場の差があっても「森先生」は威圧感のある、近寄りがたい学者ではなかったようだ。教員と教え子の良好な関係というか、人生の喜びと悲しみを分かち合える大家族のような深い絆さえ感じられる。ページをゆっくりめくると、不思議と懐かしい気持ちでいっぱいになる。何十年ぶりに家族旅行のフォトアルバムを棚の奥から取りだして、机の上に開いた瞬間に思い出が次から次へと溢れだしてくる。あの時、あの場所、あの人の記憶……。

しかし、まずはこの小冊子の主人公である「森先生」について一言を添える必要があるだろう。森先生を囲む会のみなさんの文章の中に断片的に描かれているけれども、改めてここで「森先生」の業績を簡単に紹介しよう。

森^{もり}蘊^{おさむ}氏とは、昭和期に活躍した日本庭園の歴史家であり、作庭家でもあった。明治三十八年八月八日という夏の真つ盛りに、当時の東京府立川市に生まれ、昭和六十三年十二月十四日という厳寒のなか、奈良県で生涯の幕を閉じた。享年八十三歳。『庭ひとすじ』という自伝のタイトルが示唆するように、庭園の研究と作庭に人生を捧げた人物である。

「造園の研究では学界の大御所」と言われるほど、専門家の間で森氏の業績は高く評価されている。文献資料の徹底的な収集と分析に加え、現地の精密な地形測量と発掘調査を取り入れたことによって日本

庭園史学の新しい時代を切り拓いた。また、京都の法金剛院庭園と浄瑠璃寺庭園、奈良の円成寺庭園、和歌山の紅葉溪庭園（西之丸庭園）、平泉の観自在王院庭園や毛越寺庭園などの復元整備に携わり、今日は国の特別史跡や特別名勝、世界遺産にもなっている各地の文化財の保護に尽力した。

「私の庭園史研究は、歴史のための歴史研究であるより、これからの庭園意匠の在り方を考える参考資料の収集と整理」のためにあると書き記すほど、森氏にとって庭園の研究と作庭とは切り離せないものであった。実際に、生涯をつうじて東北から九州まで多くの庭をつくった。奈良の東大寺龍蔵院庭園、唐招提寺蔵松院庭園、法華寺「仔犬の庭」、湯河原の加満田旅館庭園、久留米の遍照院庭園、和歌山城の二の丸庭園、そして晩年の代表作となった福井県武生市の紫式部公園などもあげられる。

生涯にわたって、論文や著書などの出版物は二百編を超え、庭園の調査と整備は合計で百件近く、作

庭が七〇件近く。量的にも質的にも偉業を成し遂げた人物であると言っても過言ではない。が、偉業にもかかわらず、森氏は学者としても、作者としても、一般にはほとんど知られていない。

最近になってようやく専門雑誌の記事、研究書記録映像、展示など、森氏の業績に光を当てようとする試みがみられる。ただ、そのほとんどは森氏が残した資料や手を加えた庭園に関する研究の成果であり、造園史学、建築史学、考古学、または文化財学などを究めることを目的としている。それはそれで大変重要な作業だろうけれども、なかなか学術の領域をでない。私自身「森蘊」の業績について色々と書いてきたが、直接会ったことがないのでその人となりは知らない。「森先生」を語ることはできない。森先生を一番自然に語ることができるのは、森先生を囲む会のみなさんである。

森先生を囲む会のみなさんにとって「森先生」は何よりもまず「先生」であった。全国の庭園とそれ

に関連する資料を隅から隅まで調べた人だから、知識や経験が豊富で魅力的な先生だったのだろう。しかし、一般的な大学の教員とはまた少し違う雰囲気があったに違いない。

森氏が「学界の大御所」と言われるのは、東京帝国大学を卒業し、東京工業大学で博士号を取得して、そして奈良文化財研究所に長く勤めたからである。奈良文化財研究所を退官した後は教壇に上らず、村岡正ただし（一九二六―一九九〇）とともに庭園文化研究所を設立して、庭園の研究や整備、作庭に専念した。言い換えれば、教育を選ばなかった。机の前に座る時間も多かっただろうけれども、現場に立って庭を調べる、庭を測る、庭を作ることが何よりも好きだったのではないだろうか。実際に大学で教鞭を執ったのはわずか数回だけ。

一九五一年十一月一日 東京工業大学非常勤講師
一九五六年四月一日 横浜国立大学非常勤講師

一九五七年十月一日 奈良女子大学非常勤講師
一九七一年四月一日 千葉大学非常勤講師

森氏は生涯で四つの異なる大学で非常勤講師になり、その四回とも一学期限り、各一コマを担当しただけである。先ほど、一般的な大学の教員とはまた少し違う雰囲気があったに違いないと書いたのは、そういうことである。森氏は大学や学界との関係が深くても、教育を専門とはしていなかった。形式知よりも経験知を重視していたので授業の仕方や、提供する情報も教科書どおりとはほど遠いものだったのだろう。いわゆる研究者タイプ。結果的に教養子は少ないが、森先生を囲む会のみなさんのように、大学を卒業してからも「森先生」との関係がずっと大事にして、そして没後三十年以上経ってもその思い出を大切にしている元学生さんはいる。この小冊子のオリジナリティーはそこにある。まずは学者や作者とまた異なった、教育者としての「森先生」を

垣間見せてくれること。そして、それを見せてくれるのが科学界の研究者ではなく、一般社会の女性であること。

※※※

この小冊子は森先生を囲む会のみなさんと森先生との思い出、森先生との記憶を形にしたものである。ここでまず大事なのは「と」である。みなさんと森先生。みなさんと森きよ子さん。みなさんと。

十二人の執筆者の経験に多少の隔たりがあるのは当然だが、森夫妻と一緒に共有した時間は深く記憶に刻まれており、彼女たちを集結させるものである。つまり、個人レベルの記憶を超え、集団レベルで共有された過去の想起である。森先生を囲む会のメンバーに初めてお会いしたときに一番驚いたのは、その強い共同体の意識であった。「森先生」と「奥さん」の話になると一気に会話が盛り上がり、五十年

以上前の出来事でも昨日のように楽しそうに話し合う。微笑ましいエピソード、面白おかしいエピソード、泣きたくなるようなエピソードなど。森夫妻との記憶は今や、みなさんの強い絆になっている。その絆の証を残そうと思って、文集をつくってみてはどうかと提案した。みなさんにとって、森夫妻を思い出す楽しい機会になるだろうと思ったからだ。ただ、よく考えてみれば、思い出すということ、つまり過去を呼び覚ますということは必ずしも楽しいことではない。幸せな記憶でも、それを思い出すことによって、過去は戻ってこない、去った人も戻ってこないという事実に向面することになる。懐かしさと寂しさとは紙一重。みなさんのためになると思って気楽に提案したことは、じつは大迷惑だったのかもしれない……。そう思うとちよつと不安になるけれど、言い出したものだから責任をもってやるしかない。こうして思い出、記憶、忘却、記録、歴史などについて考え始めた。

過ぎ去ったこと、過ぎ去った人は戻ってこない。

これは確固たる真実。しかし、その過去が本当に消えてなくなるのは、思い出す人や語る人がいなくなったときなのではないだろうか。過去を蘇らせることはできなくても、頭の中で呼び覚まして、会話の中で共有して、そして記録に残すことによって継承していくことができる。実際に、森先生を囲む会のみなさんが話し合っているとき、森夫妻は生き生きと、リアルで現実味を帯びてくる。色褪せたセピア色ではなく、色鮮やかでカラフルな存在になる。少なくとも、私はそう感じたから文集の提案をしたのだ。

ただ、いくら大事な思い出といっても、すべてをきちんと覚えているわけではない。特に筆を執って綴り始めると、記憶の不確かさを痛感する。いかにせん、大昔のことで正確に思い出せない、という言葉を加えている執筆者が多いのもそのためであろう。そこが思い出や記憶の難しいところ。はつきり

と覚えていることもあれば、すっかり忘れていることもある。時間が経てば経つほど曖昧になり、断片的になり、前後関係もわからなくなる。記憶と忘却とは表裏一体。何が残るのか、何が消えるのか。そのメカニズムも不思議でコントロールできない。ただし、ここに収録されているのは一人ではなく、十二人の記憶である。十二人の原稿を読み合わせると、カメラのピントを合わせるのと同じように、ぼやけていた被写体の輪郭がちよつとずつ明確になる。漠然としていたものがちよつとずつ歴然とする。おぼろげでバラバラな記憶がちよつとずつ歴史的な記録になる。

文集を提案したとき、プライベートな思い出話などを本に書き記して、公開するなんて気恥ずかしいと思われたメンバーもいらつしゃったかと思う。しかし、ここに収録されているのは十二人の自分史ではない。みなで同じテーマについて書き出すことで個性が普遍性に、親密圏が公共圏になる。破れた

写真を修復した後、それぞれの部分が目立つことなく、全体像が綺麗に浮かびあがってくるように、十二人の原稿を組み合わせたことで個人が目立つのではなく、昭和三十年代の奈良女子大学の歴史、森先生を囲む会の歴史、さらに森先生の人となりが見えてくる。

実際に、今回の文集を作成するに当たって、みなさんは歴史家と同じように精密な資料調査をされた。当時の写真や手紙などを整理したり、昭和三十三年度の奈良女子大学の開講科目一覧や授業のノートを発掘したり、森氏の著書や関連する本などを読みなおしたり、六十年以上前の記録に基づいて年表をつくったり……。みなで協力し合い、眠っていた過去を呼び覚まし、バラバラになっていた記憶を再構築した。森氏が古庭園を「復元整備」していたように、みなさんも埋もれていた思い出を発掘し、厳密な資料調査に基づいて団体の記憶を正確に復元

し、また忘却の彼方に消えてしまわないように大事に記録して、歴史に新たなページを加えた。

あの時、あの場所、あの人の記憶を語り、あの時、あの場所、あの人の記憶を継承していく。小さなことではあるかもしれないが、この文集はそのような試みである。

・本書における漢字やかなづかい、地名や年号、旧姓や新姓などの表記は各著者の意向を尊重している。細かい年代については巻末の年表を参照されたい。

・本書を作成するに当たって、奈良文化財研究所文化遺産部の遺跡整備研究室の協力を得た。この場を借りて、感謝の意を表する。

・森蘊の遺族より、自邸に所蔵されていた資料は奈良文化財研究所に寄贈され、現在は「森蘊 旧蔵資料」として整理され、その目録もインターネットで公開されている。

<https://www.nabunken.go.jp/publication/moriosamu.html>

奈良文化財研究所には「森蘊旧蔵資料」のほかに、協力者の村岡正や山中功の資料に加え、「森先生を囲む会」の数人の資料も大事に保管されている。今後の庭園史研究のために活用されることが期待される。

『庭ひとすじ』の人

——森蘊先生の思い出

2022年11月15日発行

著 者 槐の会（森先生を囲む会）

編 者 エマニユエル・マレス

発行所 綴水社

〒607-8454 京都市山科区厨子奥苗代元町10-18

電話／FAX 075-202-2327

<http://www.reisuishya.com>

デザイン・制作 上瀬奈緒子（綴水社）

印刷・製本 graphic

©2022 ISBN978-4-600-01129-1 Printed in Japan